

□6月15日説教(隅野徹牧師)短縮版
「主の賜う休み・安らぎ」(マタイ11:23～30)

全知全能の造り主である神が、その独り子を「弱い、一人間としてこの世におくられ、そのことによって、罪から救われ永遠の命を持つ希望がすべての人に与えられた」のが神の国の福音です。この福音が、「知恵ある者や賢い者には隠された」が、「幼子のような、弱く無知な者に示された」ということが起っている、とイエスは言われたのです。

注目すべきことは「賢い者は信じる事が出来ず、弱い者は信じる事が出来た」とはいわれず、「賢い者には隠された、しかし弱い者には示された」と、神の側にすべての主権があるように言われていることです。大切なのは、私たちが「この世で評価するところの賢さ」をすてて「幼子のように、助けを借りていく」そんな弱さをもって生きていくことではないでしょうか。

福音が伝わる、伝わらないも神の側の主権によるのです。私たちが「賢い者になることを追い求めるならば」福音は受けられない、それは動くことのない、いわば法則のようなものとイエスはおっしゃいます。しかし、私たちが、自分の力に頼って生きるのではなく、神の助けを借りて生きる…弱い者となるなら、福音の恵みに生きるものとなるのです。この流れを考えながら28節の言葉を理解するなら、イエスのもとに行って、共に軛をおわなければ本当の安らぎを得ることはできないということが教えられていることが迫ってくるのではないのでしょうか。負っても負わなくてもどちらでもよい…ではないのです。

わたしたちはまず「自分の力、知識」で人生を進んでいこうとすることを止めましょう。それは「世の知恵ある者、賢い者」の歩みです。そうではなくて「弱い者、力なき者」であることを認めてイエス・キリストのもとに進み出しましょう。そのとき、イエス・キリストはわたしたちに「負いやすい軛」を共に担わせてくださいます。わたしたちは、自分の重荷を共に負って下さる方と新たに歩むことによって本当の安らぎを与えられる、そのことを心に留めて今日からまた歩んでまいりましょう。(終)